

緑化樹木の病害虫診断<10>
緑化樹の害虫診断(5)

虫こぶをつくる害虫
芽、蕾、新梢の害虫
根を食う害虫



小林富士雄

(林業試験場昆虫第一研究室長・農博)

虫こぶをつくる害虫

植物が昆虫、ダニに寄生され、その刺げきによって異常な発育をした部分をゴール（虫こぶ）という。ゴールをつくる主要な虫は次のようなものである。

アブラムシ } 半翅目 (はんしもく)
キジラミ }
タマバチ——膜翅目 (まくしもく)
タマバエ——双翅目 (そうしもく)
フシダニ——ダニ目

ゴールをつくる箇所は葉が多く、芽、枝につくする場合もある。葉につく種類には、以下に述べるもののほかに、サクラにつくサクラコブアブラムシ（ゴールは葉巻状、赤色）、ケヤキにつくケ

ヤキヒトスジワタムシ（逆徳利状、径5ミリ、黄緑色）（写真-1）、クヌギにつくアサカワスジグロタマバチ（球状、径4ミリ、緑色）（写真-2）、エゴノキにつくエゴノキタマバエ（球状、径5ミリ、白色）（写真-3）、クスにつくクストガリキジラミ（イボ状、径2ミリ、紫褐色）、カシにつくカシフシダニ（イボ状、径2ミリ、黄色）などがある。

普通、虫体は虫こぶの中にいるので、防除は容易でない。虫こぶをつくるまえに薬剤散布をすれば予防できるが、虫こぶができてからでは被害葉を焼く他ない。しかし、滲とう力の強いエストックス、エカチン乳剤を散布するか、この原液を樹幹に塗る方法は、虫こぶができてからでも多少効果がある。

(1) ヤノイスアブラムシ

加害樹種 イスノキ。

虫こぶは、葉表には半球形に、葉裏にはやや突



写真-1 ケヤキヒトスジワタムシによるケヤキの虫こぶ

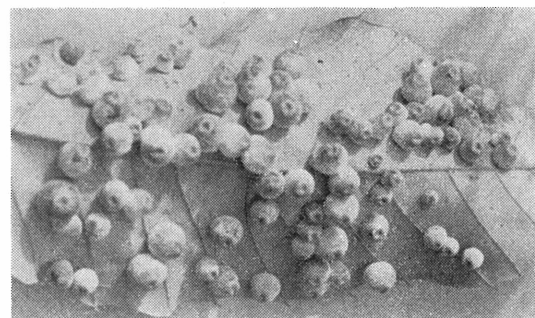


写真-2 アサカワスジグロタマバチによるクヌギの虫こぶ

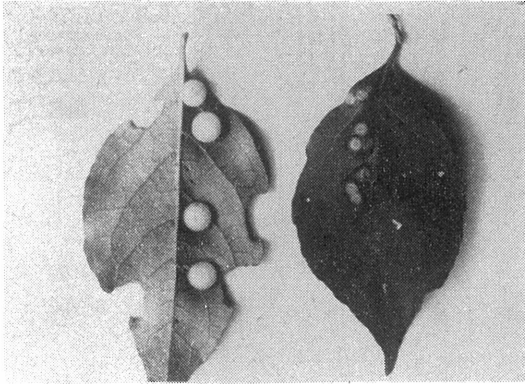


写真-3 エゴノキタマバエによるエゴノキの虫こぶ

出する(写真-4)。径4~5ミリ。緑色で、のち黒褐色となる。

イスノキの葉の上で越冬した卵からふ化した幼虫が虫こぶをつくり、その中で成熟し幼虫を産む。これが5~6月に虫こぶから脱出してコナラに移り、10月末に再びイスノキに戻ってくる。

(2) マツバナタマバエ

加害樹種はアカマツ、クロマツ。

橙黄色の幼虫がマツ葉の基部に寄生し虫こぶをつくるため、葉は短くなり最後に枯れる。

1年1回の発生。落葉層下で越冬した幼虫が蛹化し、5月に羽化し葉に産卵する。幼虫は葉の基部に集団でもぐって加害し、秋に地表に落下する。

芽、蕾、新梢の害虫

芽の害虫として有名なクリタマバチは、幼虫がクリの芽の中で生活し、その芽に虫こぶをつくる(写真-5)。このほか、マツの芽にもぐるマツノメムシ、マツノシントメタマバエがあるが、緑化木害虫として重要なものは少ない。しかし、ベニモンアオリンガのように花芽を食う害虫は花木にとっては重要である。急に花をつけなくなった場合には、花芽を食う害虫を疑ってみる必要がある。

新葉を好んで食うゾウムシ成虫、蛾の幼虫は、芽を同時に食うものが多い。花、蕾を食うものとしては、ツバキの花を食うスギタニモンキリガ

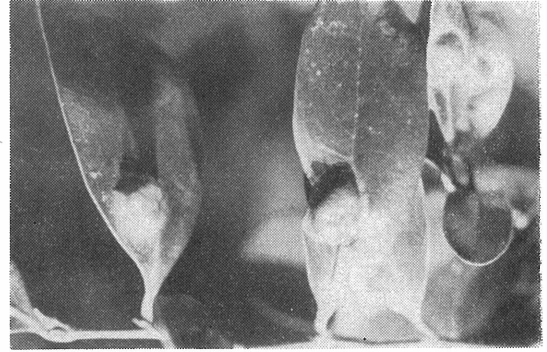


写真-4 ヤノイスアブラムシによるイスノキの虫こぶ

(幼虫は30ミリ、黄褐色)、モモの蕾、葉を食うノコメトガリキリガ(幼虫は40ミリ、灰褐色)がある。

新梢(若枝)の真中に縦穴をつくり、これを枯らすものを「しんくい虫」(図-1)と呼んでいる。主要なものは小蛾類で、そのほかクキバチ、小甲虫もある。マツのしんくい虫には数種類が知られており、マツノシンマダラメイガ(幼虫の体長25ミリ、紫褐色)(写真-6)、マツツアカシムシ(12ミリ、淡黄褐色)は普通種であるが、庭園木のマツには、後述するマツツマアカシムシが多く発生する。マツの新梢にもぐるものにマツノキクイムシ(体長4ミリの小甲虫、黒色)の「後食」加害がある。前号で触れたように、本種の幼虫は幹の樹皮下を加害し、幹から羽化脱出した成虫が一時期新梢にもぐり、しんくい虫と同じように加害する。

以上のうち、虫体を露出しているものの防除は



写真-5 クリタマバチによるクリの虫こぶ

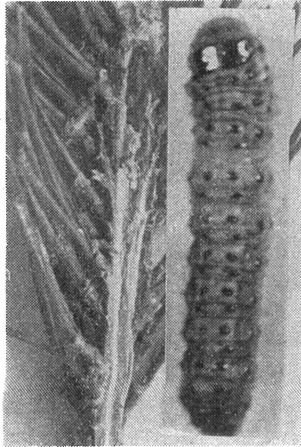
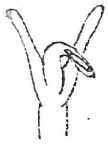


図-1 しんくい虫

写真-6 マツノシンマダラメイガの幼虫と加害

容易であるが、もぐる害虫とくにしんくい虫を薬剤で防除することは困難であり、枝ごと切りとって焼くほかはない。常発地では、被害予防の意味で、成虫の産卵期にバイジット、カルホスの乳剤を2~3回散布することが必要であろう。

(1) ペニモンアオリンガ

加害樹種はツツジ。

幼虫の体長は10ミリ。茶褐色に白斑がある。

1年2~3回の発生。春には花、蕾を、夏以後は花芽を好んで食うので翌年の花に影響する。小さい幼虫は花芽にもぐるが、大きくなると頭部のみを入れて食う。

(2) アヤニジュウトリバ

加害樹種はクチナシ。

成虫は「24鳥翅」の名の通り、前後翅ともに6本(合計24本)に枝分れし、それに長毛を生ずる特異な形態の小蛾である。幼虫は体長12ミリで黄白色。

1年2~3回発生。花の時期には蕾にもぐり、普通は新梢にもぐり枯らす。

(3) マツツマアカシムシ

加害樹種はアカマツ、クロマツ。

幼虫の体長は10ミリ、桃色。

1年1回の発生。成虫は3月に現われ、芽、葉に産卵する。4~5月に芽、新梢内を食害し(写真-7)、夏は休眠し、秋に蛹となり越冬する。

(4) モンクキバチ

加害樹種はサンゴジュ、ガマズミ。

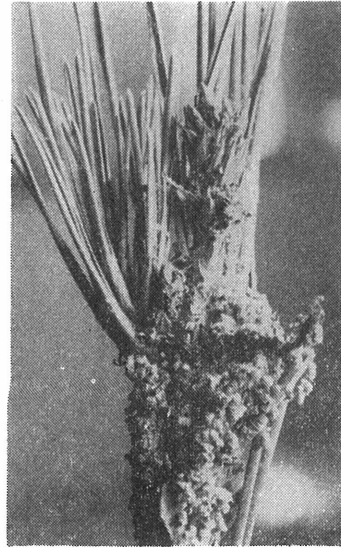


写真-7 マツツマアカシムシの加害

幼虫は脚のないウジ虫状、体長10ミリ、黄白色。

幼虫が新梢にもぐるため、新梢は下垂し枯れる。1匹の幼虫が1本の新梢にとどまらず数本を次々に加害する。

根を食う害虫

根の害虫としては、根から吸汁するワタムシの類、根の穿孔虫(キクイムシ、カミキリムシ)もあるが、重要なものは、苗の根を食うヨトウムシ(ヤガの幼虫)とネキリムシ(コガネムシの幼虫)とである。苗の根を食う害虫としては、そのほかゾウムシの幼虫、ハリガネムシ(コメツキムシの幼虫)、ケラ、カガンボの幼虫も知られている。

ヨトウムシ(図-2)

緑化樹の幼苗の茎や根が、朝突然食い切られているのはヨトウムシによる場合が多い。ヨトウガの幼虫は、一般に夜間活動性で、昼間は地被物や土中にかくれていることが多いので虫の姿が目には触れない。食い切られた苗の周囲の土を掘ってみると幼虫が見つかる。

ヨトウムシの中でカブラヤガが主要な種類である。本種は畑作野菜の大害虫でもある。幼虫の体長は40ミリに達し、黄褐色。1年に3回発生。加害は5月、6~7月、9~10月にみられる。幼虫で越冬する。



図-2 ヨトウムシ (上)

図-3 ネキリムシ (コガネムシ) (下)

ヨトウムシの防除には、ディブテレックス粉剤を地上に散布する。

ネキリムシ (図-3)

コガネムシの成虫は、6月頃から葉を食い、そのあと土中に産卵する。そこからふ化した幼虫が草木の根を食う。幼虫は土の中で越冬し、翌年成虫となって脱出する種類と、2~3年地中で幼虫時代を過すものがある。

防除薬剤としては、ジメトエートとダイアジノンがよい。速効的な効果が望まれる場合にはダイアジノンを、残効を望む場合にはジメトエートを用いる。

(次回は、12月号に掲載いたします。)